



「声」の欄・投稿規定

- ★「声」の欄は読者の皆さんのお考えを、直接誌面に反映させるためのページです。皮膚病の診療に関する日ごろのご意見、新しいアイデア、ご提言などをお気軽にお寄せください。とくに日夜第一線で診療に活躍しておられる先生方からのご投稿を切望します。
- ★「声」の欄には、また皮膚病に関する“質疑応答”を取り上げます。お寄せいただいたご質問は、その方面の権威に依頼して適切な回答を用意し、誌上で発表いたします。とくに回答者を指名されても結構です。
- ★字数は一般のご投稿は1,200字以内、質問は600字以内を原則とします。
- ★ご投稿は郵送のほか、E-mail (アドレス:hs1979@intage.com) にても受け付けております。
- ★原稿には住所・氏名を明記していただきます。

本誌9月号「Sjögren症候群の最近の知見」を読んで

本誌9月号の「臨床例」を読んでいくつか気になったことがあり、筆をとりました。

●結節性紅斑様皮疹を契機に診断できた若年成人の Sjögren症候群

「結節性紅斑様皮疹」という言葉が何度も出てくるのが気になりました。著者らは「結節性紅斑様皮疹」とした理由を、「生検組織像で真皮～皮下脂肪組織の隔壁に好中球、リンパ球を主体とした炎症細胞浸潤が軽度であり典型的な結節性紅斑とは異なっていたため」と簡単に述べていますが、これは生検する時期の問題で、結節性紅斑に限ったことではなく、炎症性疾患は一番症状が顕著な時期に皮膚科を受診するとは限りません。

私の理解では、結節性紅斑様皮疹という用語はサルコイドーシスとBehçet病に限られるのではないかと考えてきました。サルコイドーシスの場合は、下腿に一見結節性紅斑にみえる(圧痛はあまり強くない)紅斑が散在し、病理組織学的には真皮～皮下脂肪組織にサルコイド肉芽腫がみられるので、結節性紅斑ではなく結節性紅斑様皮疹として特異疹に含まれています。一方、サルコイドーシスの非特異疹として結節性紅斑はよく知られていますが日本人ではまれです。また、Behçet病では臨床的に通常(～やや小型)の結節性紅斑を呈しても病理組織学的には静脈炎の所見がみられることがあるため、結節性紅斑という人と結節性紅斑様皮疹という人に分かれていると思います。

上記2疾患は“～様”とする理由がきちんとされているので問題ないですが、件の論文には結節性紅斑様皮疹

とした理由が乏しいように感じました。若い先生には、ぜひ西山茂夫先生の巻頭言(We Like “-like”)を読んでいただきたいと思います(皮膚病診療 18:779, 1996)。

●難治性皮膚潰瘍を契機にSjögren症候群と診断した症例

これは臨床的に境界明瞭な打ち抜き様の潰瘍で、その周囲に板状の硬結と色素沈着がみてとれるので慢性の鬱滞性の下腿潰瘍でよいと思います。著者らは病理組織像で、真皮内の血管壁にフィブリノイド変性が認められたことで白血球破砕性血管炎と診断し、Sjögren症候群による皮膚血管炎によって生じた難治性皮膚潰瘍と診断されていますが、潰瘍から生検されているので、その解釈には注意が必要です。フィブリノイド変性は血管炎以外に、壊疽性膿皮症を含む潰瘍病変でもみられ、pseudovasculitisと呼ばれることもあります。Sjögren症候群に伴う皮膚血管炎をみるとはまれですが、IgA血管炎に類似する紫斑を呈する臨床像が多いようです。

バイオ製剤や美容皮膚が全盛期といった感を受けて昨今ですが、その傾向は今後ますます進む可能性があります。若い皮膚科医はもとより、その上の指導層の立場にいる皮膚科医ですら、用語の使い方が疎かになり、血管炎の皮膚病理をみられる人がいなくなってしまっているのが現状のようです。

本誌が、その歯止めとまではいかないにせよ、なんらかの役目を担ってほしいと思います。

皮膚病診療ファン
(東京都)